



女子教育
日本文法教本
金澤彦三郎著
上巻

11
300



始



11-300

文學博士金澤庄三郎著

女子日本文法教本

株式會社東京開成館



大正八年十月

本書の世に行はるゝこと既に七年その間これを實地に用ひられたる結果、教授上の便宜に基づく諸種の意見を寄せられたること少からざるは著者の深く感謝するところなり。今や本書の全部に改造を加へて修正第五版を發行せしむ。著者はこの改版によりて、教授上に一段の利便を促し、高等女子教育に於ける國文法教授の目的を達するに容易ならんことを希うて止まざる

著者

大正 8. 12. 1
内交

はしがき

本書は高等女學校及び同程度の女學校の日本文法教科書としてさきに編纂せし^{女子教育}日本文法教本を刪修して、新定教授要目に適合せしめたるものにて、一部二卷より成り、毎學年にその一卷を課するやう立案せり。

わが國語法は、學者の研究未だ盡くさざるところあり、懸案として保留せらるゝ問題甚だ多く、また學說としては既にほゞ解決したれど、これを普通教育程度の生徒に説くには便ならざるものもあり。もしこれが教授に臨みて材料の選擇當らず、説明の方法宜しからずば、徒らに生徒をして國語法の制約の煩瑣なるを歎ぜしむるのみに了らむ。もと高等女學校に於ける國語文法教

授の目的は、時代に相當する國語法上の常識を養はしむるにあ
れば、著者は本書に於て、わが國語の特性として將來に異論の生
ずる虞少き文法上の根本知識のみを綜合し、これが統一を勉め
たり。本書の内容果してこの企望に副へりや否や。著者は偏に
大方の深切なる忠言に須ちて、これが改善を將來に期す。

大正元年九月

著者

上卷目次

第一章	口語 文語	一
第二章	單語の構成	二
第三章	品詞	四
第一節	名詞	四
第二節	代名詞	六
第三節	動詞	七
第四節	形容詞	八
第五節	副詞	九
第六節	助動詞	一一
第七節	助詞	一三
第八節	接續詞	一四
第九節	感動詞	一五

第四章	動詞の活用……………	二七
第五章	形容詞の活用……………	三〇
第六章	助動詞の活用……………	三三
第七章	活用形……………	四〇
第八章	助動詞の種類……………	四七
第九章	動詞と助動詞との連続……………	五三
第十章	助動詞の相互の連続……………	六二
第十一章	助詞の承接……………	六四
附表	助動詞相互の連続表……………	
附録		

女子教育
日本文法教本 上巻

文學博士 金澤庄三郎 著



第一章 口語 文語

御代が榮える。

御代榮ゆ。

この櫻は美しい。

この櫻は美し。

花が散つた。

花散りたり。

この例の上の段の如く、談話に用ふる言葉づかひを口語といひ、下の段の如く、文章にのみ用ふるを文語といふ。

○口語にも、文語にも、共に一定の法則あり。これを文法といふ。以下に學ぶは、おもに文語の文法なり。

第二章 單語の構成

單語。

花咲く。

學を勉むべし。

この例の花咲く、學を勉むべしの如き、一つ一つの語を單語といふ。單語には數箇の單語相合して成れるものあり。次にこれを説かん。

熟語。

花、籃……………花籃。

受く、取る……………受け取る。

薄し、暗し……………薄暗し。

この例の花籃受け取る、薄暗しの如く二つ以上の單語が相合して、一つの單語となりたるものを熟語といふ。

裁縫、讀書、學校、貞操、道德、勉強、

なども、また熟語なり。

熟語にはまた三つ以上の單語より成るものあり。

丸木橋、高等女學校、卒業證書授與式。

疊語。

國々。 家々。 人々。

行くく。 見すく。 長々。

かやうに、同じ單語の相重りて成れる熟語を疊語といふ。

練習問題

次の文章の中より熟語をぬき出せ。

- 一. 青柳の絲に春風吹けり。
- 二. 山道を過ぎて、川原に出でたり。
- 三. 弟はたびく運動會を見たり。
- 四. 夕日は地上に細長き木の影をうつしぬ。
- 五. 夫人の淑徳のきこえはますます高くなれり。

第三章 品詞

單語はその用ひらるゝ役目によりて、數多の種類に分つことを得べし。その一つくの種類を品詞といふ。次にこれを説かん。

第一節 名詞

紫式部は源氏物語の作者なり。

姉は東京に出でて音楽を學べり。

この例のうちなる紫式部、源氏物語、作者、姉、東京、音楽は、いづれも物事の名を示す品詞なり。かやうの品詞を名詞といふ。

〇一、二、百、千、一、つ、二、つ、及び第一、第二、一番、二番、一箇、二箇などの如く、數または順序をあらはす名詞は、これを數詞ともいふ。

練習問題

次の文章の中より名詞をぬき出し、その數詞なるは特にこれをことわれ。

- 一. 夜寒し。
- 二. 口は禍の門。
- 三. 春には花咲き、秋には實結ぶ。
- 四. 淺草の公園には瓜生岩子の銅像あり。
- 五. 正直と勉強との二つの徳を忘るべからず。
- 六. 兄は一番にて大學を卒業せり。

第二節 代名詞

私はあなたよりも年上なり。

これは学校の徽章なり。

鶯はかしこの岡に鳴けり。

こなたの枝には花多し。

この例のうちなる私、あなた、これ、かしこ、こなたは、名詞の代に用ひたる品詞なり。かやうの品詞を代名詞といふ。

○代名詞のうちにて、私、あなたなどの如く、人の名の代に用ふるものを人代名詞といひ、これ、かしこ、こなたなどの如く、事物、場所、方向を指していふものを指示代名詞といふ。

○誰、何、どこ、どちらなどの如く、指すところの不定なる語も代名詞なり。

練習問題

次の文章のうちより、代名詞をぬき出せ。

- 一、われはおんみを妹とも思へり。
- 二、かれはわが友なり。
- 三、それはたれの蝙蝠傘なるか。
- 四、こゝを出でて、あそこに行かん。
- 五、かの夫人はあちらの庭に散歩せり。

第三節 動詞

風長閑に吹く。

庭に梅の木あり。

この例のうちなる吹く、ありは、動作または存在をあらはす品詞なり。かやうの品詞を動詞といふ。

練習問題

次の文章のうちより動詞をぬき出せ。

- 一. 花咲き、鳥鳴く。
- 二. 見る人皆感ず。
- 三. 雨やみて、月出でたり。
- 四. 夫婦相和すれば、家榮ゆ。
- 五. 常に國憲を重んじ、國法に遵へ。
- 六. 夜は早く臥し、朝は疾く起きよ。
- 七. 能ある鷹は爪をかくす。

第四節 形容詞

梅の花芳し。

廣き庭見ゆ。

この例のうちなる芳し、廣きは、物事の有様をあらはす品詞

なり。かやうの品詞を形容詞といふ。

○動詞と形容詞とを總稱して用言といひ、これに對して、名詞と代名詞とを總稱して體言といふ。

練習問題

次の文章のうちより形容詞をぬき出せ。

- 一. 櫻には美しき花咲く。
- 二. 善き友と交れば、過少し。
- 三. 先生は學博く、徳高し。
- 四. 年わかけれども、才多し。
- 五. 親しき友の家に愛らしき少女あり。
- 六. 濃き緑の常盤樹の中に、白き花の雲おりたり。

第五節 副詞

櫻は速に散りたり。

櫻は甚だ美し。

この例のうちなる速には動詞散りの意味を限定し、甚だは形容詞美しの意味を限定す。かやうに、すべて動詞、形容詞の意味を限定する品詞を副詞といふ。副詞はまた副詞の意味を限定することあり。

櫻は甚だ速に散りたり。

雨いと静に降る。

○形容詞は體言に附屬し、副詞は用言に附屬す。

○副詞は、前例の如く、その限定すべき語の直上にあることあり、また左の例の如く、他の語を隔つることあり。

友は既に裁縫科を卒業したり。

練習問題

次の文章のうちより副詞をぬき出し、いづれの語を限定せるかを述べよ。

- 一、山水の景色恰も繪に似たり。
- 二、このあたりは、流殊に速し。
- 三、徳ある者には、人おのづから歸服す。
- 四、夜は未だ明けず、四面愈暗し。
- 五、御國に生まるゝものは、皆忠孝の心あつし。

第六節 助動詞

雨降るべし。

雨降りたり。

この例のうちなるべし、たりは、動詞に結びつけて、意味を添ふる品詞なり。かやうの品詞を助動詞といふ。

○助動詞には名詞、代名詞に結びつくものあり。

孝は百行の本たり。

君はたれなるか。

○助動詞は、また他の助動詞に結びつくことあり。

昨日は雨降らざりき。

今年は豊年なるべし。

練習問題

次の文章のうちより助動詞をぬき出せ。

- 一、昨日同窓會ありき。
- 二、母と展覽會を見ん。
- 三、つしは今さかりなり。
- 四、老いたる人も來れり。
- 五、かの人は某縣の知事に任せられたり。
- 六、百聞は一見に若かず。
- 七、父は弟に日記を書かしむ。
- 八、生徒たるものは校則を守るべし。

第七節 助詞

舟を岸に寄す。

あちらの家は新し。

道近くとも、行かざれば至らず。

この例のうちなるを、に、の、は、とも、ば、は、種々の品詞につきて、他の語との關係を示す品詞なり。かやうの品詞を助詞といふ。

○助詞は、またて、に、を、はともいふ。

練習問題

次の文章のうちより助動詞をぬき出せ。

- 一、春になれば、花が咲く。
- 二、風暴れて、雨さへ降り。

- 三. 烏すらら反哺の孝あり.
- 四. われれにも行かずやど友は勸めたり.
- 五. 瀬は淺けれども流は早し.
- 六. 鐵の功用は金銀よりも大なり.

第八節 接續詞

信濃川及び石狩川は本邦の大河なり。
梅は花を賞し、また實を收む。

この例のうちなる及びまたは、語句を接續するに用ひたる品詞なり。かやうの品詞を接續詞といふ。

練習問題

- 次の文章のうちより接續詞をぬき出せ。
- 一. 松島、巖島並に橋立は日本の三景なり。

- 二. われは琴もしくはバイオリンを學ばん。
- 三. 故郷に歸らんか、或は都に留らんか。
- 四. 教を受け、而してこれを身に行へ。
- 五. 八重山吹は花美し、されど實を結ばず。

第九節 感動詞

あゝあゝ樂しきかな。

いでいでその時の有様語り申すべし。

この例のうちなるあゝ、いでいでの如く、感動したる時に發する語を感動詞といふ。

練習問題

- 次の文章のうちより感動詞をぬき出せ。
- 一. あなあな美しきかな月の色かな。

- 二、いざ散歩に行かん。
- 三、すは大事起りたり。

練習問題

- (イ) 以上學びたる品詞の種類を挙げよ。
- (ロ) 體言とはいかなる品詞を稱するか。また用言とはいかに。
- (ハ) 次の文章を一つ一つの品詞に別ちて、その名を述べよ。
 - 一、學を修め、業を習ふ。
 - 二、あはれ悲しきかな。
 - 三、朱に交れば赤し。
 - 四、邪は正に勝たず。
 - 五、親の恵は海よりも深し。
 - 六、われらの學校は始めて落成せり。
 - 七、伯母上は今歸られたり、されどまだ遠くは行かるまじ。
 - 八、大空にそびえて見ゆる高ねにも、登れば登る道はありけり。

(明治天皇御製)

第四章 動詞の活用

動詞の活用。

- 花咲かず。
- 花咲きたり。
- 花咲く。
- 花咲けり。

右の例の如く、咲くといふ動詞の語形は種々に變ず。すべて動詞は用ひやうの異なるにつれて、語形の變ずるものなり。かやうに語形の變ずることを活用といふ。

○動詞の活用をなすに、一語の中に變せざる部分と變ずる部分とあり。その變せざる部分を語根といひ、變ずる部分を語尾といふ。前の例の

さく(咲く)といふ動詞にて、さは變せざれば語根にて、くは變する部分なれば語尾なり。

動詞の活用の種類。前例の咲くといふ動詞につきて、その語尾の變化を見れば、

咲かず、

咲きたり、

咲く、

咲けども、

となりて、カ行の中にてか、き、く、け(即ちア列、イ列、ウ列、エ列)に活用せり。

また欲すといふ動詞につきて、その活用を見るに、
われは欲せず、

われは欲したり、

われは欲す、

かれも欲するか、

かれは欲すれども、

となりて、サ行の中にて、せ、し、す(即ちエ列、イ列、ウ列)及びすに、
る、れの添ひたるものなり。

また起く、著るといふ二つの動詞につきて、これを見るに、

われは起きず、

われは衣をき著す、

われは起きたり、

われは衣をき著たり、

われは起く、

われは衣をきる著る、

君も起くるか、

かれも衣をきる著るか、

かれは起くれども、

かれは衣をきる著れども、

となりて、起くの活用はき、即ちイ列、ウ列及びくにる、れの添ひたるもの、著るの活用はき、即ちイ列及びきにる、れの添ひたるものなり。これを五十音圖(巻尾附録二頁にあり)に對照すれば、

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
咲く	咲	か	き	く	け	こ
欲す	欲	さ	し	す <small>へれる</small>	せ	そ
起く	起	か	き	く <small>へれる</small>	け	こ
著る		か	き <small>へれる</small>	く	け	こ

となりて、咲くはカ行の四段にわたり、欲すはサ行の三段に

わたり、起くはカ行の二段にわたり、著るはその一段のみなり。かやうに動詞の活用には、四段、三段、二段、一段と、さまざまの種類あり。次にその細目を説かん。
四段に活用するもの。

(四段活用) ラ行變格活用。ナ行變格活用)

四段活用

起くがカ行の中の四段に活用することは、これを知れり。更に示す、勝つ、思ふ、讀む、走るの數語につきて、これを見んに、

- 示さず。 勝たず。 思はず。 讀まず。 走らず。
- 示したり。 勝ちたり。 思ひたり。 讀みたり。 走りたり。
- 示す。 勝つ。 思ふ。 讀む。
- 示すか。 勝つか。 思ふか。 讀むか。 走るか。
- 示せども。 勝てども。 思へども。 讀めども。 走れども。

かやうに、その活用いづれも五十音圖のア列、イ列、ウ列、エ列の四段にわたれり。されば、これを四段活用と名づく。次に走る、有りの二動詞につきて、これを見んに、

人走らず、

人有らず、

人走りたり、

人有りたり、

人走る、(ウ列にて言ひきる)

人有り、(イ列にて言ひきる)

人走るか、

人有るか、

人走れども、

人有れども、

ラ行變格活用

となりて、共にラ行中のらり、る、れ(即ちア列、イ列、ウ列、エ列の四段に活用すれども、言ひきる場合に、走るはウ列なるに、有りはイ列なり。)イ列にて言ひきる語は、ラ行の有りの一語のみ(この他に居

ナ行變格活用

り、侍りの二語あれども、今は多く用ひずなれば、これを四段活用と別ちて、ラ行變格活用といふ。また死ぬといふ語は、

死なず、

死にたり、

死ぬ、

死ぬる人、

死ぬれども、

死ぬ、

と活用して、ナ行の中のな、ぬ、ね(即ちア列、イ列、ウ列、エ列の四段にわたれることは、四段活用と同じけれども、死ぬる人、死ぬれども、の如くる、れの添ふことは、四段活用と異なり。)

かやうの語はナ行の死ぬ、往ぬの二語のみなれば、別にこれをナ行變格活用と名づく。
 三段に活用するもの。

(カ行變格活用、サ行變格活用)

欲すといふ動詞の三段に活用することは、既にこれを知れり。更にこれをく(來)といふ動詞と比較せんに、

かれは欲せず、	かれはこ(來)ず、
かれは欲したり、	かれはき(來)たり、
かれは欲す、	かれはく(來)、
かれも欲するか、	かれもくる(來)か、
かれは欲すれども、	かれはくれ(來)れども、

となり、これを五十音圖と對照すれば、

カ行變格活用
及びサ行變格
活用

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
く(來)		か	き	く <small>く<small>へ</small>れる</small>	け	こ
欲す	欲 <small>ヨク</small>	さ	し	す <small>す<small>へ</small>れる</small>	せ	そ

となりて、く(來)はき、く(こ)即ちイ列、ウ列、オ列の三段、欲すはし、す、せ(即ちイ列、ウ列、エ列)の三段に活用す。されば、これを別ちて、く(來)をカ行三段活用またはカ行變格活用と名づけ、欲すをサ行三段活用またはサ行變格活用と名づく。

○カ行變格活用はく(來)の一語のみ。
 ○サ行變格活用は、本來の動詞としては、す(爲)の一語なれども、他の語と合して熟語を造ること多きが故に、廣く用ひらる。例へば、

(上一段活用。下一段活用)

著るといふ動詞の一段に活用することは、既にこれを知れり。更にこれを蹴るといふ動詞と比較すれば、

われは衣をき(著)ず、
われは鞆をけ(蹴)ず、

われは衣をきる(著る)、
われは鞆をける(蹴る)、

われは衣をきれ(著れ)ども、
われは鞆をけれ(蹴れ)ども、

となる。これを五十音圖と對照すれば、

蹴る	著る	動詞
か	か	ア列
き	き さへれる	イ列
く	く	ウ列
け けへれる	け	エ列
こ	こ	オ列

上一段活用及び下一段活用

となる。されば、更にこれを分類して、著るの如きを上一段活用といひ、蹴るの如きを下一段活用といふ。

○上一段活用に屬する動詞は、普通に用ふるは左の數語のみ。

射る、鏽る、著る、似る、煮る、干る、見る、惟みる、鑑みる、顧みる、試みる、居る、用ゐる、率ゐる。

但し試みるは試む、マ行上二段、用ゐるは用ふ、ハ行上二段とも活用す。

○下一段活用に屬する動詞は蹴るの一語のみ。

練習問題

- (イ) 動詞活用の種類を擧げよ。
- (ロ) 四段活用とナ行變格活用、ラ行變格活用との區別を述べよ。
- (ハ) 上二段活用と下二段活用との區別を述べよ。
- (ニ) 次の文章のうちより動詞をぬき出して、その活用の種類を述べよ。
 - 一、 わが行く先はあそこに見ゆる里なり。
 - 二、 歳月は人を待たずといへり。

- 三 かれは母に似て、才あり
- 四 人に媚ぶるはいやしむべし。
- 五 周章つるときは、物事を誤る。
- 六 夕立はれて、虹あらはれたり。
- 七 おのれに優る人を友とすべし。
- 八 不徳を恥づる心を失ふべからず。
- 九 家を出でてより十年を経たり。
- 一〇 おこる平家は遂に亡びたり。
- 一一 こゝに立てたるは、矢を射んがための的なり。
- 一二 わかき時に學ばずば、悔あること多し。

第五章 形容詞の活用

形容詞の活用。

庭廣く、築山あり。

庭廣し。

廣き庭。

庭廣けれど、樹少し。

この例のうちなる廣しの如く、形容詞にも活用あること、動詞と異ならず。次にこれを説かん。

○形容詞の活用にて、またその變化する部分を語尾といひ、變化せざる部分を語根といふ。

ク活用。

夏は暑くして。

夏は暑し。

暑き夏。

夏は暑ければ。

この例の如く、暑しといふ形容詞の語尾は、く、し、き、けれの四様に變化す。かやうの活用をク活用といふ。

シク活用。

朝は涼しくして。

朝は涼し。

涼しき朝。

朝は涼しければ。

この例の如く、涼しといふ形容詞の語尾は、しく、し、き、けれの四様に變化す。かやうの活用をシク活用といふ。

○動詞は五十音圖の中の同行に活用すれども、形容詞は、カ行、サ行の兩行にわたりて活用す。

○シク活用は涼し、正し、美しの如くなるを普通とすれども、往々惡しし、勇まししなどの如く、しを重ぬることあり。

練習問題

(イ) 形容詞の活用の種類を挙げよ。

(ロ) 次の文章のうちより形容詞をぬき出して、その活用の種類を述べよ。

- 一、 高くけはしき山を越ゆ。
- 二、 舊き友にあひて、珍しき話を聞きたり。
- 三、 この石は、小けれど、重し。
- 四、 憂き事の數積れど、志堅くして、奪ふべからず。
- 五、 かの兄弟の睦まじきこと羨ましきばかりなり。
- 六、 池の水清ければ、深き底の石も明かに見ゆ。
- 七、 その繪は美しけれども、氣品なし。

第六章 助動詞の活用

助動詞の活用。

月出でたらん。

月出でたり。

月出でたるべし。

月出でたれば、空明くなれり。

この例の如く、助動詞にもまた活用あり。次にこれを説かん。
下二段活用に等しきもの。

助動詞

馬を馳せず、

馬を馳す、

馬を馳するか、

馬を馳すれば速し、

助動詞

字を書かせず。

字を書かず。

字を書かするか。

字を書かすれば巧なり。

右の例の如く、すといふ助動詞は、下二段活用の動詞馳すに等しき活用に等しきもの。この他、下二段活用の動詞に等しき活

用をなす助動詞には、る、らる、さす、しむ、つあり。
ナ行變格活用に等しきもの。

助動詞

死なん、

死にけり、

死ぬ、

死ぬるか、

死ぬれば、

死ね、

助動詞

行きなむ。

行きにけり。

行きぬ。

行きぬるか。

行きぬれば。

行きね。

右の例の如く、ぬといふ助動詞は、ナ行變格活用の動詞死ぬに等しき活用に等しきもの。

ラ行變格活用に等しきもの。

動詞

あらん

あり

あるか

あれば

助動詞

行きたらん

行きたり

行きたるか

行きたれば

右の例の如く、たりといふ助動詞は、ラ行變格活用の動詞ありに等しき活用をなす。この他、ラ行變格活用の動詞に等しき活用をなす助動詞には、なり、ぬり、けり、りあり。ク活用に等しきもの。

形容詞

夏は暑くして

夏は暑し

助動詞

行きたくして

行きたし

暑き夏

夏は暑ければ

行きたき時

行きたければ

右の例の如く、たしといふ助動詞は、ク活用の形容詞暑しに等しき活用をなす。この他、ク活用の形容詞に等しき活用をなす助動詞には、べしあり。シク活用に等しきもの。

形容詞

涼しくば

朝は涼し

涼しき朝

涼しければ

助動詞

行くまじくば

行くまじ

行くまじきやうなり

行くまじければ

右の例の如く、まじといふ助動詞は、シク活用の形容詞涼し

に等しき活用をなす。

○下二段活用に等しきもの、ナ行變格活用に等しきもの、ラ行變格活用に等しきものなど、動詞の活用に等しき活用の助動詞を、動詞活用の助動詞といひ、ク活用に等しきもの、シク活用に等しきものなど、形容詞の活用に等しき活用の助動詞を形容詞活用の助動詞といふ。

特殊の活用をなすもの。ずむらむけむきの五つの助動詞の活用は、動詞または形容詞の活用とは異にして、その状左の如し。

一。ず。

行かずして。

行かぬ處。

行かねば。

右の例の如く、ずといふ助動詞はず、ぬ、ねの三様に活用す。

二。む。らむ。けむ。

行かむ。

われこそ行かぬ。

右の例の如く、むといふ助動詞はむ、めの二様に活用す。らむ、けむの活用も、またこれに同じ。

○むらむ、けむは音便にてんらん、けんとも書く。

三。き。

われは行きき。

わが行きし處なり。

獨り行きしかば、淋しかりき。

右の例の如く、きといふ助動詞はき、し、しかの三様に活用す。

練習問題

次の文章のうちより助動詞をぬき出して、その活用の種類を答へよ。

- 一、遊ぶべき時には遊ぶ。ウ活用
- 二、聞くまじき事を聞くは悪し。シ活用
- 三、食へども、味を知らず。
- 四、兄には柔道を習はせ、妹には料理法を學ばしむ。
- 五、友來しかば、共に師の君を訪へり。
- 六、雷に打たれたる木あり。
- 七、雨降り出でつ。明日にもならば霽れむ。
- 八、わが見し事ならねば、うけあはれず。

第七章 活用形

動詞の活用して變ずる語形には、各その用法あり。今ナ行變格活用の死ぬといふ動詞につきて、これを見るに、

將然形	連用形	終止形	連體形
一。死 ^ぬ む	二。死 ^に に	三。死 ^ぬ ぬ	四。死 ^ぬ る
「老いて將に死 ^ぬ んとす」といふが如く、多くの將來に成立せんとすることをあらはすに用ふる形なり。されば、これを將然形と名づく。	「死に果てたり、死に難し」などの如く、多く用言に連ぬるに用ふる形なり。されば、これを連用形と名づく。	「生きてるものは死 ^ぬ ぬの如く、多く文句を言ひきるに用ふる形なり。されば、これを終止形と名づく。	「死 ^ぬ る人」の如く、多く體言に連ぬるに用ふる形なり。されば、これを連體形と名づく。

已然形

五. 死ぬれ、
「國事に死ぬれば、恨なし」の如く、多く事の已に確定せるに用ふる形なり。されば、これを已然形と名づく。

命令形

六. 死ぬ、
「國のために死ぬ」の如く、命令の意をあらはすに用ふる形なり。されば、これを命令形と名づく。

以上の將然形、連用形、終止形、連體形、已然形、命令形の六様の語形を總稱して、活用形といふ。

○この六様の名稱は、各その用法の一つに就きて、便宜に命名したるものなれば、他にもなほ用ひ方ありと知るべし。

動詞の活用形。諸活用の動詞の語尾をこの六様の活用形にあつれば、左表の如し。

活用	動詞	語根	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
四段活用	咲く	咲	か	き	く	く	け	け
上二段活用	起く	起	き	き	く	くる	くれ	き
下二段活用	受く	受	け	け	く	くる	くれ	け
上一段活用	著る	著	き	き	きる	きる	きれ	き
下一段活用	蹴る	蹴	け	け	ける	ける	けれ	け
カ行變格活用	來	來	こ	き	く	くる	くれ	こ
サ行變格活用	欲す	欲	せ	し	す	する	すれ	せ
ナ行變格活用	死ぬ	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行變格活用	有り	有	ら	り	り	る	れ	れ

○四段、ナ行變格、ラ行變格の三活用を除く外は、命令形に助詞よを伴ふ。例へば、

起きよ、受けよ、著よ、蹴よ、來よ、欲せよ。

○終止形と連體形とを往々混同して誤り用ふることあり。例へば、

山簀ゆの。

山簀ゆる（誤謬）

國を憂ふる人。 國を憂ふ人（誤謬）

形容詞の活用形。形容詞にもまた動詞の如く、種々の活用形を作ることを得べし。但し動詞には命令形あれども、形容詞には闕けたり。

活用	形容詞語	根	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ク活用	暑し	暑	く	く	し	き	けれ	—
シク活用	涼し	涼	しく	しく	し	しき	しけれ	—

○形容詞の連用形くは、動詞ありと融合してかりとなり、ラ行變格活用の活用をなして、命令形を有す。例へば、

水清くあり、……水清かり。 水清かれ。

行正しくあり、……行正しかり。 行正しかれ。

助動詞の活用形。助動詞の活用形は、動詞活用の助動詞にては、その活用の等しき動詞に同じく、形容詞活用の助動詞にては、その活用の等しき形容詞に同じ。

活用	助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
下二段活用に等しきもの	す	せ	せ	す	する	すれ	—
ナ行變格活用に等しきもの	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ
ラ行變格活用に等しきもの	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
ク活用に等しきもの	たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	—
シク活用に等しきもの	まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	—

○但しラ行變格活用に等しき活用をなす助動詞のうちにて、めり、けり、りにはいづれも命令形なく、またこれらの助動詞の將然形たりの連用形たりは、今は多く用ひられず。

特殊の活用をなす助動詞の活用形。特殊の活用をなす助動詞にも、また種々の活用形を作ることを得べし。

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(一) す	す	ず	す	ぬ	ね	—
(二) む	—	—	む	む	め	—
(三) き	—	—	き	し	しか	—

○助動詞す、べし、の連用形す、べくは、動詞ありと融合して、ざり、べかりとなり、ラ行變格活用と同じき活用をなす。例へば、

行かずあり、……行かざり。
行くべくあり、……行くべかり。

○動詞、形容詞、助動詞の連體形は、その下に連なるべき體言の省略せられて、直ちに名詞の如く用ひらるゝことあり。
言ふ(事)は易く、行ふ(事)は難し。

故き(事)を濡ねて、新しき(事)を知る。

問はぬ(事)は一生の恥なり。

○終止形にて言ひきるべきに、連體形を用ふるは誤なれども、きといふ助動詞に限りては、連體形にて終止することあり。

われは久しく友に逢はざりし。

第八章 助動詞の種類

受身の助動詞。

われは級長に選ばる。

われは總代に擧げらる。

この例の如く、らるは他より動作をしかけらるゝことであらはず。これを受身の助動詞といふ。

○らるはまた可能の意に用ひらる。例へば、

われは一日に十里歩まる。
われは困難にも堪へらる。

使役の助動詞。

父は太郎を東京に行かす。
父は太郎に草花を植ゑさす。
父は太郎を東京に行かしむ。

この例の如く、す、さす、しむは他の者に動作をなさしむることをあらはす。これを使役の助動詞といふ。
尊敬の助動詞。

母上も大いに喜ばる。
先生歸省せらる。
殿下知事を召さす。

殿下競技を御覽せさす。

この例の如く、る、らる、す、さすはまた他の動作を尊敬していふことをあらはす。これを尊敬の助動詞といふ。
打消の助動詞。

これは花にあらず。
これは花にあらじ。
この例の如く、ず、じは動作を打消す。これを打消の助動詞といふ。

希望の助動詞。

われは行きたし。
この例の如く、たしは動作を希望することをあらはす。これを希望の助動詞といふ。

過去の助動詞

時の助動詞。時の助動詞は、動作の行はるゝ時をあらはすものにて、過去、未來、完了の三種に分る。

かれは山に登りき。

かれは學校に行きけり。

かやうに、きけりは動作の既に前に行はれしことをあらはすものなれば、これを過去の助動詞といふ。

われは山に登らむ。

未來の助動詞

かやうに、むは動作の今より後に行はれんとすることをあらはすものなれば、これを未來の助動詞といふ。

かれは山に登りぬ。

かれは學校に行きつ。

完了の助動詞

かれは山に登りたり。

かれは學校に行けり。

かやうに、ぬ、つ、たり、りは動作の全く終了したることをあらはすものなれば、これを完了の助動詞といふ。

以上きけり、む、ぬ、つ、たり、りをすべて時の助動詞といふ。

推量の助動詞。

かれは行くらむ。

かれは行きけむ。

かれは行くべし。

かれは行くめり。

かれは行くまじ。

この例の如く、らむ、けむ、べし、めり、まじは動作を推量す。これを推量の助動詞といふ。

○べしは可能の意、命令の意にも用ひらる。例へば、
 如何なる高山にも登らば登るべし。(可能)
 汝行くべし。(命令)

指定の助動詞。

われは朝鮮に行くなり。

この木は櫻なり。

東京は日本の首都なり。

われはわれなり。

この例の如くなりたりは動作及び事物を指定す。これを指定の助動詞といふ。

○助動詞のうちにて、體言に附くは、指定のなりたりとの二語のみ。
 ○時の助動詞たりは動詞に、指定の助動詞たりは體言に附く。

助動詞の種類を表。

(一) 受身の助動詞	る、らる
(二) 使役の助動詞	す、さす、しむ
(三) 尊敬の助動詞	る、らる、す、さす
(四) 打消の助動詞	ず、じ
(五) 希望の助動詞	たし
(六) 時の助動詞	き、けり、む、ぬ、つ、たり、り
(七) 推量の助動詞	らむ、けむ、べし、めり、まじ
(八) 指定の助動詞	なり、たり

第九章 動詞と助動詞との連続

動詞と助動詞との連続。

死なしむ。

死にたり。

死ぬべし。
死ぬるなり。

この例の如く、助動詞が動詞に續くに、しむはその將然形よりし、たりはその連用形よりし、べしはその終止形よりし、なりはその連體形よりす。これによりて、助動詞が動詞に續くには、それと定まりたる法則あるを知るべし。
將然形に續く助動詞。

字を書かず。
字を書かじ。(打消)
字を書かむ。(時)
字を書かず。
花を活けさす。(使役)

字を書かしむ。
字を書かる。
花を活けらる。(受身)

この例の如く、ずしむ、すさす、しむる、らるの八つの助動詞は動詞の將然形に續く。

○すどさすと、またるとらるとは、動詞につくに區別ありて、す、らるは四段活用、ナ行變格活用及びラ行變格活用の動詞につき、さす、らるはその他の諸活用の動詞につく。

○さす、らるがサ行變格活用の動詞につくには、その將然形に續きて、
裁縫せさす。 説諭せらる。
となるべきを。
裁縫さす。 説諭さる。
といふことあり。

○しむが下二段活用の動詞得につくには、その將然形に續きて得しむと
なるべきを得せしむといふことあり。

連用形に續く助動詞。

- 字を書きぬ。
- 字を書きつ。
- 字を書きたり。
(時)
- 字を書きき。
- 字を書きけり。
- 字を書きけむ。(推量)
- 字を書きたし。(希望)

この例の如く、ぬ、つ、たり、き、けり、けむ、たし、の七つの助動詞は
動詞の連用形に續く。

○きがカ行變格活用、サ行變格活用の動詞につくには異例あり。

一、カ行變格活用の動詞には、し連體形、しか(已然形)のみその將然形、連用
形に續き、き終止形は續かず。

二、サ行變格活用の動詞には、し、しかはその將然形に續き、きはその連用
形に續く。

これを表にて示せば、左の如し。

活用の種類	動詞	將然形	助動詞	連用形	助動詞
カ行變格活用	く(來)	こ	き	き	き
サ行變格活用	す(爲)	せ	し	し	し

○かやうに、し、しかはサ行變格活用の將然形に續きて、せし、せしかとなる
より、これと混同して、サ行四段活用にては

- 押しし、
- 押ししか、
- 示しし、
- 示ししか、

となるべきを、

押せし、

示せし、

押せしか、

示せしか、

といふことあり。

終止形に續く助動詞。

火消ゆらむ。

火消ゆべし。

火消ゆめり。

火消ゆまじ。

(推量)

この例の如く、らむ、べし、めり、まじの四つの助動詞は動詞の終止形に續く。

○但しラ行變格活用にありては、特にその連體形に續く。例へば、
人有るらむ。

人有るべし。

人有るめり。

人有るまじ。

連體形に續く助動詞。

花を活くるなり。(指定)

この例の如く、なりといふ助動詞は動詞の連體形に續く。

○なりはまた形容詞の連體形にも續く。

志の高きなり。

已然形に續く助動詞。

字を書けり。(時)

この例の如く、りといふ助動詞は四段活用の動詞の已然形に續く。

○但しサ行變格活用の動詞には、その將然形に續く。

音楽を稽古せり。

〇りは四段活用、サ行變格活用より外の動詞にはつかず。

動詞と助動詞との連続の表。

未然形 ものに續く ず じず (打消) む(時) す さす (使役) (尊敬) しむ る らる (受身) (尊敬)	連用形 ものに續く けむ (推量) ぬ つ たり (時) き けり たし (希望)	終止形 ものに續く らむ べし (推量) めり まじ	連體形 ものに續く なり (指定)	已然形 ものに續く り (時)
---	--	--	----------------------------	--------------------------

この表は助動詞が普通に續く活用を標準として作れるものなれば、その連續に異例あるものには特に。をつけたり。

練習問題

- (イ) 見る、見る、見る、見るは如何なる動詞に續くか。
- (ロ) さの連續に異例あらば述べよ。
- (ハ) らむ、べし、めり、まじの連續に異例あらば述べよ。
- (ニ) りは如何なる動詞に續くか。
- (ホ) 次の文章のうちに助動詞の連續の誤あらば正せ。
 - 一、これはわが讀書しし室なり。
 - 二、急に霧る、まじと、雨を衝きて出づ。
 - 三、このあたりに塵埃をすづるべからず。
 - 四、某地まで新に道路を設けり。
 - 五、人争ひて募に應じしかば、義捐金はよく集れり。
 - 六、使をして明日旅だつよしを知らしむ。

第十章 助動詞の相互の連續

助動詞の相互の連續。助動詞は數箇を併せ用ひて、種々の

複雑なる意味をあらはすことを得。これを助動詞相互の連続といふ。

助動詞の相互に連続するには、それ〴〵定まりたる法則あり。例へば、

しむ、らむ、べし、なり、

右の四つの助動詞を、この順序にて連ぬるには、上なる語は、下なる語に續かんがために、それ〴〵適當なる活用形によりて、

行か 終止形 しめ 終止形 らる 終止形に續く助動詞 べき 連體形 なり 連體形に續く助動詞

となるが如し。

即ち助動詞の將然形に續くものは、助動詞に續くにも、その將

然形よりし、終止形に續くものは終止形よりし、連體形に續くものは連體形よりするなど、その續く活用形は動詞と助動詞とによりて異なることなし。

○らむ、べし、めり、まじの如く、ラ行變格活用動詞に限りてその連體形に續くものは、活用のラ行變格活用に等しき助動詞にも、またその連體形に續く。

なほ卷末の助動詞相互の連續表を参照すべし。

練習問題

次の文章のうちにて、助動詞の連續に誤あらば正せ。

- 一、妹にこの繪を見さしたし。
- 二、車を走らして、客を迎へしめり。
- 三、それにて讀ましむるべければ、聞きたまふべし。
- 四、力を添へて、望を遂げさせべし。
- 五、決して御心配下されまじく候。

第十一章 助詞の承接

助詞が動詞、形容詞、または助動詞を承くるにも、定まれる法則あり。

ばの承け方。 ばは動詞、形容詞、助動詞の將然形及び已然形を承け、これを下に接續して、順當なる結論を造るに用ひらる。而して將然形を承くるときは假定の意を示し、已然形を承くるときは、確定の意を示すものなり。例へば、次の如し。

燈を消さば、暗からん。(假定)

燈を消せば、暗し。(確定)

寒くば、火をたかん。(假定)

寒ければ、火をたく。(確定)

行かしめば、行かん。(假定)

行かしむれば、行く。(確定)

とも、ど、どの承け方。 とも及びど、どもの三語は、共に動詞、形容詞、助動詞を承け、これを下に接續して、反對の結論を造るに用ひらる。

ともは動詞の終止形及び形容詞の將然形を承けて、假定の意を示す。例へば、次の如し。

曇るとも、雨降らざらむ。

貧しくとも、悲しまじ。

○**とも**が助動詞を承くるには、動詞活用、助動詞には終止形を承け、形容詞活用、助動詞には將然形を承く。

○どもはまた動詞及び使役受身の助動詞の連體形を承くることあり。

年月を經るども、色は變らじ。

強ひて行はしむるども、效なからん。

いかに批評せらるゝども、厭はじ。

どもは共に用言及び助動詞の已然形を承けて、確定の意を示す。例へば、次の如し。

雨は降れども、風は吹かず。

花は小けれども、香は高し。

行かしむれども、行かず。

○ども、ごどもの代に助詞もを用ふることあり。

何等の理由あるも(ありども)、許さず。

期限は迫りたるも(たれども)、準備は未だ成らず。

との承け方。とは體言につきて語を並列するためもの

にして、その語ごとにこれを添ふるを法則とす。例へば、

牛と馬とは有用なる動物なり。

東京と大阪と京都とはわが國の三大市なり。

○されど、時によりては、最後の^とを省略することあり。例へば、

われどかれどは朋友なり。

月と雪と花とは、いづれか美しき。

但し

われは蘭と菊との花を愛す。

といふ文にて、最後の^とを省略するときは、次の二様のいづれなるか明かならず。

われは蘭と菊との花を愛す。

われは蘭と菊の花を愛す。

されば、かやうの場合には、その意味に従ひて、^とを添ふるを要す。

ついでに承け方。つゝもても動詞及び受身、使役の助動詞

につきて、その連用形を承く。

日照りつゝ、雨降る。

演奏者は拍手に迎へられつゝ、壇に登れり。

馬を走らせつゝ、矢を射る。

春過ぎて夏来る。

風に吹かれて花落つ。

使を走らせて醫師を迎ふ。

に、を、がの承け方。 に、を、がは動詞、形容詞、助動詞の連體形を承け、事の意外に出でたることを示す。

われは行くに、かれ獨りとゞまれり。

道はなほ遠きを、はや疲れたり。

使を遣りたるが、未だ歸り來らず。

や、かの承け方。 や、かは共に疑ふ意をあらばし、動詞、形容詞、助動詞につくには、やはその終止形を、かはその連體形を承く。

園に花ありや。

園に花あるか。

花の色は赤しや。

花の色は赤きか。

花咲きたりや。

花咲きたるか。

○やは動詞、形容詞、助動詞の連體形をも承く。

園に花あるや。

花の色は赤きや。

花咲きたるや。

練習問題

次の動詞、形容詞、助動詞に一つくば、ども、ごも、に、や、かをつけよ。

一、舞ふ。

二、編む。

三、流る。

四 示す。

五 欲す。

六 燃ゆ。

七 近し。

八 安し。

九 睦まじ。

一〇 空し。

一一 弱し。

一二 啼かす。

一三 作らしむ。

一四 思ひき。

一五 見らる。

練習問題

次の文のうちに、ごといふ助詞の用法を誤れるものあらば正せ。

- 一 われごかれの父は同年なり。
- 二 日本は清國とロシアの海軍を殆ど全滅せしめたり。
- 三 利根川は下總と常陸の境を流る。
- 四 小犬と小猫を抱きたる少女をかきたる畫あり。
- 五 朝鮮と臺灣と樺太の南半は帝國の領土となりぬ。

女子教育 日本文法教本 上卷 終

助動詞相互の連続表

上 下	なり	たり*	す	べし	めり	まじ	き	けり	む	ぬ	つ	たり	り	す	さす	しむ	る	らる	たし
す	ならず	たらず	—	(べからず)	—	—	—	—	—	—	—	(たらず)	(らず)	せず	さす	しめず	れず	られず	(たからず)
じ	ならじ	たらじ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	しめじ	れじ	られじ	(たからじ)
む	ならむ	たらむ	(せらむ)	(べからむ)	—	—	—	—	—	なむ	てむ	たらむ	(らむ)	せむ	—	しめむ	れむ	られむ	(たからむ)
さす	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	れさす	られさす	—
しむ	ならしむ	たらしむ	(せらしむ)	(べからしむ)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	れしむ	られしむ	—
らる	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	せらる	せらる	せらる	—	—	—
き	なりき	たりき	(せらる)	(べらる)	—	—	—	—	—	—	—	たりき	らる	せらる	せらる	せらる	せらる	せらる	(たからる)
けり	なりけり	たりけり	(せらる)	(べらる)	—	—	—	—	—	—	—	たりけり	—	せらる	せらる	せらる	せらる	せらる	(たからる)
形	—	—	—	(べらる)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

(一) 現今多く用ひざるもの。
 (二) 助動詞ありと融合したるもの連続。
 *x 逆形に續くものを便宜によりて繰入れたるもの。
 肯定の助動詞

五十音圖。

第一文字

ワ行	ヲ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行		
ワ	ヲ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	ア列	片假名
ヰ	ヱ	ヲ	ヱ	ヰ	ヱ	ヱ	ヱ	ヱ	ヱ	イ列	
ウ	ヱ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	ウ列	
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	エ列	
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	オ列	

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア列	平假名
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ列	
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ列	
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ列	
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ列	

第一文字

一

濁音の假名。

	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
ガ行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ行	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
ダ行	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ

パ行音の假名。

	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
ガ行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ダ行	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
バ行	バ	ビ	ブ	ベ	ボ

撥音の假名。

片假名
ン

平假名
ん

第二 假名遣大要

その一 國語假名遣

國語假名遣。

- (一) 權
- (二) 藍
- (三) 代

この三語は(一)かい、(二)あい、(三)くいといひて、その語の下は共にいと呼べども、これを假名にて書くときは、

- (一) かい
- (二) あい
- (三) くい

と書き分けざるべからず。かやうに、國語を正しく假名にて書く法を、國語假名遣といふ。

紛れ易き假名。國語假名遣にて紛れ易き假名は左の如し。

- 一、い、あ、ひ。
- 二、え、ゑ、へ。
- 三、お、を、ほ。

- 四 は、わ
- 五 ふ、う
- 六 じ、ぢ
- 七 ず、づ

國語假名遣につきての心得。數多き國語の假名遣を明かにすることは甚だ難ければ、必要に應じ、辭書につきて求むべし。今次に廣く國語假名遣につきて心得おくべき數條を示さん。

一 語の上に於ける假名遣

いへ(家) おも(頼) ひと(人)

紛れ易き假名が、右のい、お、ひの如く一語の上に来るときは、いへ、おは、ひと、ふの假名は紛るゝことなく、じとぢと、またずとづとの相紛るゝ語なし。いとゐと、えとゑと、おとをとの場合には、多くはい、え、おを用ひ、おゑを用ふることは甚だ少し。

*この符號あるものは本来の國語にはあらざれど、便宜のためここに載す。

わ	わ(井)	わ(猪毛)	わ(買)
ゐ	ゐ(眞)	ゐ(居)	
を	を(麻緒)	を(桶)	を(陸田)
	を(伯叔父)	を(伯叔母)	を(尾)
	を(とこ男)	を(んな女)	を(こせ藤)
	を(とつひ二昨日)	を(鴛鴦)	を(節)
	を(ろち大蛇)	を(折)	を(さむ治納收)
	を(居)	を(ざる桶)	を(がむ拜)
	を(しふ敷)	を(惜)	を(さなし幼)
	を(ふ終)		

二 語の中または下に於ける假名遣

紛れ易き假名が右のい、お、ひの如く、一語の中または下に來るときは、
ひ、へ、ほ、は、ふの假名を用ふること多く、い、えを用ふることは甚だ少く、
おを用ふることは全くなし。じとぢと、またずとづとの場合には、ぢ、
づを用ふること多し。

かい(種)

もとの(基)

くひな(水雞)

い

かい(種)

さいはひ(幸)

たいまつ(松明)

ついたち(翅)

ついで(序)

ついはむ(啄)

ないがしろ(蔑)

ふいご(籠)

やいば(刃)

さいづち(槌)

ひいき(最良)

え

ふえ(笛)

ひえ(稗)

さゞえ(菜螺)

きのえ(甲)

ゐ

あゐ(藍)

くれなゐ(紅)

くわゐ(慈姑)

あぢさゐ(紫陽花)

もとの(基)

くらゐ(位)

ゑ

ひきゐる(牽)

まゐる(參)

こゑ(聲)

つゑ(杖)

する(末)

つくゑ(机)

いしずゑ(礎)

ゆゑ(故)

こずゑ(梢)

を

あを(青)

さを(傘)

とを(干)

うを(魚)

かつを(鰐)

みさを(撲)

かをり(香)

しをり(采)

たをやめ(手弱女)

しをる(萎)

わ

あわ(泡)

しわ(皺)

くつわ(轉)

くわゐ(慈姑)

いわし(鱈)

はらわた(腸)

ゆわう(硫黄)

あわつ(周章)

さわぐ(騒)

かわく(乾)

たわむ(撓)

よわし(弱)

うう(植)

うう(飢)

すう(据)

じ

あるじ(主)

にじ(虹)

つじ(辻)

きじ <small>(雄)</small>	ひつじ <small>(羊未)</small>	かじ <small>(雌)</small>
うじ <small>(蛆)</small>	つゝじ <small>(郵局)</small>	はじ <small>(種)</small>
はじ <small>(椒)</small> かみ <small>(椒生薑)</small>	ひじ <small>(鹿尾菜)</small>	くじ <small>(圃)</small>
さじ <small>(匙)</small>	さじ <small>(積敷)</small>	はじ <small>(始)</small>
まじ <small>(なひ)</small> <small>(兜)</small>	なじ <small>(む)</small> <small>(馴染)</small>	にじ <small>(む)</small> <small>(染)</small>
はじ <small>(く)</small> <small>(運)</small>	まじ <small>(はる)</small> <small>(交)</small>	みじ <small>(かし)</small> <small>(短)</small>
かたじ <small>(け)</small> <small>(なし)</small> <small>(辱)</small>	しじ <small>(み)</small> <small>(規)</small>	にじ <small>(る)</small> <small>(睡)</small>
ねず <small>(み)</small> <small>(鼠)</small>	みゝず <small>(蚯蚓)</small>	くず <small>(葛)</small>
はず <small>(管)</small>	かず <small>(數)</small>	きず <small>(傷)</small>
はず <small>(み)</small> <small>(機)</small>	たゝず <small>(む)</small> <small>(行)</small>	かならず <small>(必)</small>
すず <small>(鈴)</small>	すず <small>(め)</small> <small>(雀)</small>	すず <small>(り)</small> <small>(視)</small>
すず <small>(し)</small> <small>(涼)</small>	こず <small>(る)</small> <small>(積)</small>	いしず <small>(る)</small> <small>(礎)</small>

その二 字音假名遣

字音假名遣

- (一) 櫻
- (二) 鴨
- (三) 鷗
- (四) 王
- (五) 嫗

これらの漢字は皆「オ」の如く發音すれど、これを假名にて書くときは、

- (一) あう、
- (二) あふ、
- (三) おう、
- (四) わう、
- (五) をう、

の如く書くを正しとす。かやうに字音を假名にて正しく書 法、字音假名遣といふ。

字音假名遣につきての心得

一つ一つの漢字の字音假名遣を明かにすることは甚だ難ければ、必要なるときは、字書につきてこれを求むべきなり。今次に廣く字音假名遣につきて心得おくべきこと三個條を示さん。

一 文字の構造相通するもの

竟 境 鏡……………きやう。

共 供 恭……………きよう。

この例の如く、構造に相通ずるところありて、發音の相似たる漢字の字音假名遣は、大抵相同じ。但し、例外ありて例へば工、紅、虹などはこ
うなれど、江はかうなり、寺はじなれど、持時はずなり、朮はぢゆつなれ
ど、述術はじゆつなり、女はぢよなれど、汝如はじよなるが如し。

委……………ゐ。

倭……………わ。

員……………ゐん。

圓……………ゑん。

音……………おん。

暗……………あん。

またこの例の如く、構造に相通ずるところありて、發音の同行に通ふ漢字の字音假名遣は、大抵同行に通ふ。但し、これにも例外あり、例へば隱はいんにて穩はをんなるが如し。

二 他音の下に来るい

艾……………あい。

才……………さい。

貞……………てい。

正……………せい。

推……………すゐ。

類……………るゐ。

この例の如く、字音假名遣には、ア列またはエ列の下にて「イ」と發音するものは「い」と書き、ウ列の下にて「イ」と發音するものは「ゐ」と書くべし。

三 促音にも長音にも讀むもの

執權……………しつけん。

執心……………しふしん。

雜誌……………ざつし。

雜巾……………ざふきん。

この例の如く、促音にも長音にも發音する漢字にては、その長音を書くに、促音にてつと書く代にふを用ふ。

終

